

おくはらせいこ 奥原晴湖

明治時代に活躍した女流画家 古河市



(古河歴史博物館提供)

天保8年(1837) - 大正2年(1913)。古河藩大番頭池田政明の四女として生まれる。古河藩士で南画家の枚田水石に学び、中国の先人や狩野派、渡辺華山などの作品を数多く模写する。その後、関宿藩士奥原家の養女となり、本格的に絵を学ぶため江戸に出て、晴湖と号した。明治のはじめから20年代までの間に晴湖の名声はあがり、多くの弟子を指導。門人の中には、東京美術学校の創設や明治美術界を牽引した岡倉天心もいた。画中に自作の漢詩句を晴湖独自の書体で書き込んだ、詩書画一致が作品の特徴である。一生を独身で通し、豪放な絵を描いた晴湖はまさに女傑という名にふさわしい。絵によって、明治初期における女性の社会進出に大きな一歩をしるした人物である。

奥原晴湖は、古河藩の大番頭を務めていた池田繁右衛門政明の四女として生まれ、幼名を「せつ」といいました。父が文武に優れていた武士であったせいか、幼いころから男まさりの勝ち気な性格であったようです。習字や読書もよくしたようですが、どちらかという学問より柔剣道や絵を好んでいたという風変わりな娘であったといわれています。絵については、古河藩の南画<中国画の一つ>家、枚田水石に学び、明や清などの中国の先人たちの作品や、狩野派<江戸幕府の御用絵師の一派>や渡辺華山などの、当時日本を代表する画家の作品を数多く写しとったりしていました。

(江戸に出て南画家になりたい。)

晴湖はこう思うようになりますが、女流画家など考えることもできない時代だったので、父は猛反対をします。そのうえ、女子が藩を出ることは許されていませんでした。しかし、晴湖はあきらめません。何度も何度も父を説得します。そこで、晴湖はお婆の嫁ぎ先にあたる関宿藩士奥原源次左衛門帯刀の養女になることにし、藩を出ることにしました。そして奥原家に3日間滞在した後、江戸に出ます。この時、晴湖は29歳になっていました。またこのころ、号<画家としての名>を「晴湖」としたといわれています。

明治元年(1868)、土佐藩主であった山内容堂の会に招待され、男にも勝る堂々とした態度で人々に接したので、容堂にたいへん気に入られたといわれています。そしてこの会が契機となり、晴湖は木戸孝允など大政治家たちと親しい交友関係がもてるようになりました。



「芦雁図」(茨城県近代美術館蔵)

晴湖は「女だてらに…」とか「女だから…」という考えが大きらいでした。しかも筋の通らないことには相手がどんなに大人物であっても、決して応じなかったといわれています。明治4年(1871)に「断髪令」がでて、男性が鬚を切り、ザンギリ頭になったことに対して、晴湖もまた黒髪をバツサリと断ち切り、ザンギリ頭になります。それ以後の晴湖は、一生ザンギリ頭で通し、身なりも男のような格好をしていました。

明治5年(1872)のことです。皇后陛下のお召しにより、御前揮毫<皇后の前で作品を書くこと>をすることになりました。一礼をした晴湖は、ゆうゆうと筆を動かし、見事な梅の図を描きあげたといわれています。

晴湖の作品には、必ずといってよいほど、自分で作った漢詩が書きこまれています。それはよく見ると、作品の中にどのような漢詩を取りこむかを計算しており、漢詩と絵が相まってすばらしい世界をつくりだしているといえます。

晴湖はまた、多くの弟子たちを指導しましたが、東京美術学校〔東京芸術大学〕を創設した岡倉天心(P.7参照)も、明治9年(1876)、13歳の時に晴湖の門人となって学んだ一人です。

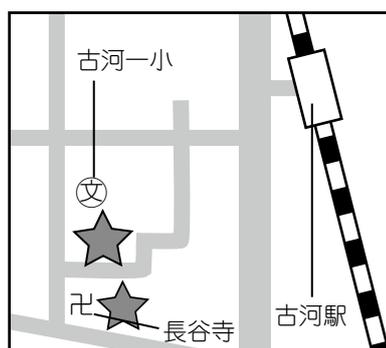
女流画家として、男性に交じって堂々と生きた晴湖は、明治の美術界の女傑といわれるのにふさわしい人物であるとともに、明治初期において、絵という自らの実力によって、女性の社会進出に大きな一歩をしるした人物ともいえるでしょう。

ゆがりのスポットに行ってみよう

古河歴史博物館・奥原晴湖画室(繡水草堂)

所在地 古河市中央町3-10-56

内容 奥原晴湖の業績が紹介されているとともに、多くの作品を所蔵し、鑑賞することができます。また、晩年を過ごした画室も併設、公開しています。



おもな 参考文献

『茨城の顔』(室伏勇・茨城新聞社・1969)

『郷土史にかがやく人びと』(青少年育成茨城県民会議・1971)